外部評価報告書

平成 25 年 6 月

静岡大学情報学部

大学院情報学研究科

目　次

はじめに

第 1 章　平成 25 年静岡大学情報学部外部評価の概要

第 2 章　外部評価調査票結果のまとめ

第 3 章　外部評価調査票全回答

おわりに

付録 1　平成 25 年度静岡大学情報学部概要説明

付録 2　静岡大学情報学部自己評価について

はじめに

情報学部は、平成７年（1995 年）10 月に設置され、翌年の４月に第１期生を迎え入れて、早 18 年間が経過しました。情報学部は、その設立の目的に「文と工を融合させた教育と研究」をかかげ、工学系の情報科学科、文系の情報社会学科の２学科編成体制で、コンピュータ科学や情報システムの設計から情報社会のデザインまで幅広い領域をカバーする総合的学部として発展してきました。また平成 12 年には大学院情報学研究科を設置し、情報学に関する高度専門的職業人の育成も行ってきました。

情報学部は、静岡大学の中で最も新しい学部として出発したため、当初から他の学部に先駆けてさまざまな新しい取り組みに挑戦してきました。一つは、教育活動の取り組みです。学士課程では平成 16 年度入学生から導入した 2 学科 3 プログラム制のカリキュラム（両学科から選択できるプログラムの設置）や、修士課程での教育の実質化の取り組みや OJL（On the Job Learning)を取り入れた実践的な特別プログラムを実行してきました。

二つ目には、これらの取り組みをさらに実りのある教育実践にするために、下記のような文部科学省の教育改革支援プログラムに応募し、採択されて支援を受けることができた点です。

・平成 16ー20 年度：文部科学省大学教育改革支援プログラム（特色 GP)「多角的評価で磨く文工融合型情報学教育」

・平成 19ー21 年度：文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP)「技術者の実践的対応力育成プログラム」(静岡大学教育センター・工学部と共同)

・平成 20ー22 年度：文部科学省大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP)「マニフェストに基づく実践的ＩＴ人材の育成」

・平成 18ー21 年度：文部科学省先導的 IT スペシャリスト育成プログラム「OJL による最先端技術適応力を持つ IT 人材の育成拠点の形成」(名古屋大学・南山大学、愛知県立大学と共同)「OJL による最先端技術適応力を持つ IT 人材の育成拠点の形成」

これらの教育改革支援プログラムを実施できたことで、単に新しい取り組みを行うだけに止まらず、プロジェクトに組み込まれた PDCA サイクルの重要性を私たちは改めて認識することができました。

三つ目が、文工融合の研究をいっそう推進するための学部内の研究支援体制です。静岡大学の中でいち早く学部内に平成 16 年に情報学研究推進室を設置し、情報学部客員教員制度をつくりました。そして客員教授としてわが国の産業界・大学・公的機関で活躍している多士済々のメンバーを迎え、本学部教員との共同研究の推進や学部・大学院の教育にも参加して頂く体制を整えました。さらには、情報学のプロジェクト研究をいっそう進めるため、3 年計画プロジェクトを公募で 3 プロジェクト選定し、研究資金の一部を援助し、大きな外部資金獲得をめざす X プロジェクト制度も創設しました。

四つ目には、それまでの就職対策委員会を改組して平成 20 年にキャリア支援室を設置して、それまでよりもさらに強力できめ細かな学生への就職支援活動を実行していること

です。私たちは、平成 12 年 3 月に世に出る第一期生のために、それこそ教員全員が身を粉にして求人探しに奔走し、就職内定率 100%を達成したことは今でも忘れられない思い出です。そして第 1 期生を送り出して以降、応募書類の添削、未内定者への特別支援などを行うとともに、平成 22 年度から学部独自で合同企業説明会も実施しています。毎年 1 回、情報学部キャリア支援室の下、100 社を超える企業から情報学部・研究科の学生獲得をめざして、説明会が開催されています。

五つ目が、平成 20 年に地域連携室を設置して取り組んだ地元地域社会への貢献活動です。学生の活動として、浜松市内小中学校への IT 教育ボランティア活動を平成 14 年から行っています。平成 21 年には情報学部に、地域再生人材養成ユニットの実施機関として、組込みシステムアーキテクト研究所を設置しました。この研究所を中核として制御系組込みシステムアーキテクト養成プログラムを、文部科学省科学技術振興調整費の援助を受けて実施してまいりました。今年から、この事業を独立させて浜松市・浜松商工会議所と共同して、地元企業の会員を募り、「コンソーシアム」を立ち上げました。

また、文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」による支援を受けて、浜松商工会議所などと協働して、浜松地域の IT 業界における喫緊の問題である人材不足の解消に向け、静岡大学の先進的 IT 教育を地域に開放して、社会人の再教育ニーズを実施しました。

上記のように情報学部が実行したさまざまな取り組みを書き上げてみますと、我ながら本当に新しい多くのことに挑戦してきたことと、感慨さえ覚えてしまいます。このような私たちの取り組みの中で、欠かせなかったものが、一部、上述させて頂きましたが普段からの「評価活動」です。現在、どの大学・学部でも実施している学生による授業アンケート（教員へのフィードバックシステムも含む）も，学部創設以来、いち早く実施しています。

学部創設以来の私たちの活動を総括する形で、これまで 3 回の自己評価（平成 9・20・24 年度）、2 回の外部評価（平成 11 年度・20 年度）を実施して来ました。今回の平成 25 年度実施の外部評価は、第二期中期目標・計画期間（平成 22ー27 年度）の前半部を対象にした平成 24 年度自己評価を元にしております。この平成 24 年度自己評価は、取りまとめ作業期間を含む関係から平成 22 年度ー23 年度を中心に評価しております。しかしながら、今回評価された内容は、情報学部創設以来、私たちが一所懸命取り組んできたこと全体への評価でもあったと痛感しております。また、今回の平成 25 年度の外部評価にあたってはできるだけ平成 24 年度の実績も盛り込むように致しました。

さてこのたびの平成 25 年度外部評価委員を、まず全国的な観点で、IT 産業界から淺川和雄氏（株式会社富士通研究所フェロー）、大学経営および情報科学の研究者の立場から公立はこだて未来大学中島秀之氏（学長）、文系の情報学研究者の立場から米田公則氏（椙山女学園大学学長補佐・文化情報学部教授）の 3 名の方々に就任をお願いしました。さらに地元地域社会の観点で、行政分野から寺田賢次氏（浜松市企画調整部長）、IT 産業界から平岡法昭氏（ヤマハモーターソリューション株式会社代表取締役社長）、さらに静大情報学

部に最も多くの入学生を送り込んで頂いている高校から磯貝信二氏（静岡県立掛川西高等学校長）の 3 名の方々にお願いいたしました。

外部評価にあたって、委員の皆様からは、貴重なご意見・ご提言を数多く頂きました。ご多忙の中、本学部・研究科の評価活動に多大なご協力をいただきましたこと、厚く御礼を申し上げます。情報学部・研究科教職員一同、頂きましたご評価・ご意見・ご提言を真摯に受け止め、文工融合の情報学の発展にむけて、教育研究およびそれらを通じた地元地域を中心とする社会との連携のさらなる発展に向けて努力する所存です。今後ともどうか活動を暖かく見守って頂き、ご忌憚のないご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。

平成 25 年 6 月 28 日

静岡大学情報学研究科長・情報学部長　　西原　純

第１章　平成 25 年静岡大学情報学部外部評価の概要

１．外部評価の目的、実施方法、日程等

(1) 目的

「はじめに」に記されているように、静岡大学情報学部は、カリキュラムの大きな改編や文部科学省支援諸プログラムの実施など、継続的に学部・研究科の教育改革に取り組んできている。これまでもこれらの経過を自己評価するとともに、有識者の方々からの外部評価を受け、更なる改革の方向を検討してきたが、このたび、前回(平成 20 年度)の自己評価・外部評価以降の５年間の学部・研究科の組織、教育システム、入試、教育内容とその成果、研究、組織の自己点検、社会貢献、国際交流などの諸点について評価を受け、今後の発展に資することを目的として外部評価を実施した。

(2) 外部評価委員

浜松市企画調整部長	寺田　賢次
静岡県立掛川西高等学校長	磯貝　信二
公立はこだて未来大学長	中島　秀之
椙山女学園大学学長補佐・文化情報学部教授	米田　公則
株式会社富士通研究所フェロー	淺川　和雄
ヤマハモーターソリューション株式会社代表取締役社長	平岡　法昭

(3) 評価方法

① 情報学部自己評価 WG が作成した『自己評価報告書』及び『自己評価報告書資料集』(平成 25 年 3 月)を事前に外部評価委員に送付し、事前調査を依頼する。

② 外部評価委員会を開催し、情報学部・大学院情報学研究科の概要説明と質疑応答、学部内調査を行う。

③ 以上の事前調査、実地調査をもとに書面により評価結果を提出いただく。

④ 外部評価の結果を情報学部外部評価 WG が報告書にまとめて公表する。

(4) 外部評価日程

① 平成 25 年 5 月～	事前調査
② 平成 25 年 6 月 18 日、21 日	外部評価委員会
③ 平成 25 年 6 月 24 日	外部評価報告
④ 平成 25 年 6 月 25 日～30 日	報告書とりまとめ
⑤ 平成 25 年 7 月 1 日	報告書公表

２．静岡大学情報学部外部評価委員会

情報学部外部評価委員会は、以下の要領で２回に分けて行われた。

① 日時 ： 平成 25 年 6 月 18 日(火) 13：00ー17：10
場所 ： 情報学部大会議室他
出席者

(外部評価委員)

・浜松市企画調整部長	寺田　賢次
・静岡県立掛川西高等学校長	磯貝　信二
・公立はこだて未来大学長	中島　秀之
・株式会社富士通研究所フェロー	淺川　和雄
・ヤマハモーターソリューション株式会社代表取締役社長	平岡　法昭

(学部関係者)

・研究科長・学部長	西原　純
・評議員	酒井　三四郎
・情報科学科長代理	塩見　彰睦
・情報社会学科長	森野　聡子
・自己評価 WG	漁田　武雄、太田　剛、近藤　真
・前入試委員長	山田　文康
・教務委員長	笹原　恵
・FD 委員長	堀内　裕晃
・外部評価 WG	藤井　史朗、小西　達裕、小暮 悟

議　事　　(司会 ： 藤井)

1. ガイダンス　　13 時ー13 時 10 分
①学部長挨拶
②学部関係者自己紹介
③外部評価委員自己紹介

2. 学部内容説明　　13 時 10 分ー14 時 30 分
①自己評価報告書の説明(漁田)
②学部・研究科概要説明(西原研究科長)
③外部評価報告書説明等(藤井)

3. 質疑応答　　14 時 30 分ー15 時 15 分

休憩　　15 時 15 分～15 時 30 分

4. 学部内視察　　15 時 30 分～16 時 20 分
①研究室(ID･IS プログラム　西原研究室)
②研究室(IS･CS･ID プログラム　杉山岳弘研究室)
③授業(CS プログラム情報科学実験Ⅰ)
④研究室(CS･IS プログラム　横山研究室)

5. 評価委員まとめ　　16 時 20 分～16 時 40 分

6. 講評　　16 時 40 分～17 時

② 日時 ： 平成 25 年 6 月 21 日(金) 14：00～16：20
場所 ： 情報学部学部長室他
出席者

(外部評価委員)
・椙山女学園大学学長補佐・文化情報学部教授　　米田　公則

(学部関係者)
・研究科長・学部長　　西原　純
・自己評価 WG　　漁田　武雄
・外部評価 WG　　藤井　史朗

議　事　　(司会 ： 藤井)
1. ガイダンス　　14 時～14 時 10 分
①学部長挨拶
②学部関係者自己紹介
③外部評価委員自己紹介

2. 学部内容説明　　14 時 10 分～15 時 30 分
①自己評価報告書の説明(漁田)
②学部・研究科概要説明(西原研究科長)
③外部評価報告書説明等(藤井)

3. 質疑応答　　15 時 30 分～15 時 35 分

4. 学部内視察　　15 時 35 分ー16 時 00 分

①研究室(ID･IS プログラム　西原研究室)

②授業(CS プログラム情報科学実験Ｉ)

5. 評価委員まとめ　　16 時 00 分ー16 時 10 分

6. 講評　　16 時 10 分ー16 時 20 分

第２章　外部評価調査票結果のまとめ

外部評価調査票結果の全回答は次章に掲載するが、本章では各評価項目ごとに外部評価委員による評価をまとめる形で記述する。

なお、下記にある外部評価は各委員・各基準ごとに次の４段階で数値評価もなされた。

４：十分に達成している。大いに期待できる水準である。

３：概ね達成している。概ね適切・良好である。

２：改善が必要である。

１：抜本的な改善が必要である。

【基準１】組織の目的について

情報学部/研究科の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.7)

21 世紀の情報社会で先導的役割を果たす高度な実践力を有する人材形成のため、情報科学と情報社会学を融合させた情報学教育を展開するという当学部・研究科の組織目的は、適切であると評価できるが、グローバル化に対応した教育目的の設定が必要との意見も指摘できる。現在の国際環境変化に呼応し、世界の中での新たな情報社会形成を意図した目的の再吟味も今後検討する必要があろう。

【基準２】組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、情報学部/研究科の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.8)

情報科学科と情報社会学科の 2 学科体制と、文工融合の情報学を追求する 3 プログラム制による教育展開をしている学部、またその上に立って 1 専攻による情報学研究・教育を組織している研究科の体制、またそれを支える教授会運営等は、大変高く評価できる。そしてこの文工融合情報学研究･教育の体制･成果を広く社会に知ってもらうべきと考える。

【基準３】教員及び支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.5)

教員の配置、採用・昇格、事務職員の配置などについて、全体に 4 ポイント(最高点、十分に達成している。大いに期待できる水準である)3 名、3 ポイント（概ね達成している。概ね適切・良好である）3 名と概ね高く評価しているが、女性教員・外国人教員のさらなる比率向上、社会・国際連携分野強化についての意見もある。情報学部・研究科のこれら教員比率は静岡大学の中では低くはないが、今後も男女共同参画推進、グローバリゼーションへの対応などは進めていく必要があろう。

【基準４】学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.3)

学部・研究科のアドミッション・ポリシーの設定、また学部の推薦・AO・一般入試の体制、研究科入試のあり方について、全体には高く評価できるが、6 名中 4 名の外部評価委員が 3 ポイントである。特に問題としては、アドミッション・ポリシーと入学方法(とりわけ推薦・AO 入試)の関係の明確化、AO 入試の効果、研究科入試における入学定員未達成等を指摘する。情報学部では創設以来、入試には大きな力を割いてきており、効果も上げていると聞いており、近時においても AO 入試の改善などに取り組んでいるというが、さらに競争力を高め、学部・研究科の質を高める入試体制を作り上げていく課題は大きい。

【基準５】教育内容及び方法について

①（学士課程）

教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されているか。

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.8)

文工融合理念に基づく、2 学科 3 プログラム制の学部のカリキュラム・ポリシーについては、3 プログラムの特色、体系的な教育について大変高く評価できる。その実施に対しては、講義・演習・実習・実験の関連についての評価、実践的システム演習の産業界貢献への期待、インターンシップ・グループワーク・フィールドワーク・IT スペシャリストプログラムなどの社会人基礎力育成において期待が持てる。なお、改善の余地は少なくないとはいえ、3 プログラム制カリキュラムと実習・演習を重視した教員による集団運営教育の成果は評価できるといえる。ただし、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーの今後の常なる再検討も必要であると思われる。

②（大学院課程）

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等（研究・論文指導を含む。）が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.8)

情報学研究科のカリキュラム・ポリシーは、高度情報社会に寄与しえる高度専門職業人の育成を文工融合教育により目指すものだが、これについても高く評価でき、特に修士論文作成過程における学会発表の義務付け、外部の客員教員等によるアドバイス体制を敷いていることなどを評価した。しかし、ID 系についてもっと情報技術の活用を促すべきであろう。

【基準６】教育の成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.3)

情報学部・情報学研究科では、創設以来就職支援にはとりわけ力を入れており、静岡大

学他学部に比較しても高い就職率などの成果を挙げている。この点は、就職先企業への調査の実施などと合わせ、高く評価できる。しかし、4 名の委員から 3 ポイントが付けられており、卒業生のより精緻な状況の捕捉、英語能力が「非常に重要である」とする企業の少なさなどとも関わって、英語力向上を今後の課題として指摘した。また、「社会人基礎力」の形成への期待も指摘した。同窓会組織の拡大・実質化とも合わせて、卒業生の就職後の動向をより直接に捉える調査の実施など今後の課題となろう。

【基準７】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。

学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.7)

施設・設備などの整備、学生への支援については、概ね高く評価しており、特にオンライン学生ポートフィリオの導入、学生相談週間体制等が高く評価できる。しかし、シラバスには記載されている「オフィスアワー」の実質化も指摘したい。学生相談週間における指導教員による年 2 回の全学生の動向確認は、学生の大学生活からの離脱を未然に防ぎ、また適切な指導を行う機会となって機能しているが、日常の学生との接触を促す機会を増やすことに注意を喚起する必要もあろう。

【基準８】内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.8)

FD（ファカルティ・デベロップメント）委員会を中心とする授業改善等は、ほとんどの委員が最高点 4 点で評価した。特に、授業報告書、授業アンケート、授業参観などの取り組みや、これら授業評価を踏まえての各教員の授業改善などの営みに注目する。近時においても授業評価の得点は高まっており、授業の自己点検・改善をさらに進めることは、基準 5 の教育内容の充実化につながるものであり、今後とも中心的活動の一つとして推進して頂きたい。

【基準９】管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.3)

管理運営体制の中での特に事務組織については、自己評価報告書においても国の「定員削減政策」による職員数の減少傾向を指摘しており、パート職員・派遣職員採用による対応の問題など、この点についての危惧を指摘した。教職員の多忙化への危惧もある。全体的には適切に対応しているとの評価である。必要な人員確保については、学部・研究科の努力を超える要因もあるが、必要な事務組織の確保については、事務組織改編議論の中でも重視される必要があろう。また、複数の委員が指摘しているように、危機管理に関わる体制がマニュアルに即して適切に機能するかどうかの検証も必要となろう。

【基準１０】情報等の公表について

情報学部/研究科の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.7)

教育研究活動の公表については、適切に行われているとの評価がほとんどで５名の委員が最高点４点を付けているが、広報については今後とも工夫を重ねていくべきであろう。学部・研究科の教育研究活動の新たな展開についての情報を、不断に大学外に発信していくことは、情報学部受験生の質・量的拡大、保護者の安心とバックアップ体制の確保、就職に関わる企業その他機関との関係強化、また産学協同や地域貢献の有効な実施にとっても極めて重要であり、日常的なチェック・改善をさらに進める必要があろう。

【基準１１】研究活動の状況及び成果について

情報学部/研究科の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

情報学部/研究科の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.7)

研究活動については、４名の委員が最高点４点を付けており、情報学部点検評価委員会の検証、情報学研究推進室による「Ｘプロジェクト」によるグループ研究支援、情報学研究交流会などを特に評価した。学部・研究科の研究の質・量的拡大は、今後さらに求めら

れる環境下にあり、ただでさえ公務での多忙さが指摘される中では、特に個々の教員、教員集団への多面的な研究支援が意識的に進められる必要があろう。

【基準１２】地域貢献活動の状況について

本学及び情報学部/研究科の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　4.0)

地域貢献活動については、全委員が最高点を付けている。特に評価すべき点は、情報学部地域連携推進室の設置による「IT 教育ボランティア活動」の実施や公開講座、商工会議所とのホームページ作成連携事業、浜松市・地元企業と連携した「組み込みシステムアーキテクト」育成プロジェクトや浜松地域知的クラスター創成事業への参加などについてである。大学全体、学部・研究科の社会的な存在証明として、地域社会への実質的貢献とそれが社会的に認知されることは最も重要な活動領域となる。現在の高い評価をさらに追い風として、新たな取り組みも考えていく必要がある。

【基準１３】国際化の状況について

情報学部/研究科の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

【評価】(外部評価ポイント平均　3.0)

国際化の状況については、全委員が 3 ポイントと、やや低い。研究科における国内外インターンシップの取り組みや情報学部専門教育としての英語教育の重視などは評価できるが、外国人学生の受け入れや学生の海外派遣のさらなる積極的な取り組み、TOEIC の得点向上などを指摘した。英語教育へのさらなる支援、学生が海外に接する機会の拡張など、不断に追求される必要がある。

総合評価（全体を通してのコメント　外部評価全ポイント平均　3.6）

基準１から１３までの外部評価ポイントの全項目平均値は 3.6 に達し、全体として「充分に達成している」に近い評価を与えることができよう。中でも、文工融合教育の実施とその体制、地域貢献活動の展開、研究室の活性化、海外大学との連携、女性教員・外国人教員の採用によるダイバーシティ向上などの点を特に高く評価した。他方、社会系情報学の今後の更なる飛躍への期待、数量化できる評価項目では活動成果の数量的検定と、全国の大

学における位置づけ評価の実施、社会人基礎力形成への期待などを指摘したい。全体に、文工融合を軸に様々に模索してきた静岡大学情報学部・情報学研究科は適切に運営され成果を挙げており、これまでの基本指針を継承しつつ、さらに充実・飛躍の道を模索していくことを期待したい。

第３章　外部評価調査票全回答

本章で調査票回答のすべてを示す。

【基準１】組織の目的について

情報学部/研究科の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

評価欄　［　４　３　４　４　３　４　；　平均３．７　］

自由記述欄

〔A 委員〕

情報科学と情報社会学両面の見識を兼ね備えた人材の育成を目的とする文工融合の教育理念は、今後ますます進展する高度情報化時代の要請に適っているものと考える。

〔C 委員〕

情報系の学部としての使命を認識した活動を展開している。

〔D 委員〕

情報学部規則ならびに情報学研究科規則において、教育研究上の目的が明記され、また大学ホームページにおいて、学位授与の方針が明示され、社会的にも公表されている。また、アドミッション・ポリシーでは「育てる人間像」「目指す教育」が示されている。

〔E 委員〕

概ね適切であるが、教育目的の中に、世界に通用するグローバルな知見を身に付け文化の進展に寄与すること、を明記すべき。基準６でもグローバル化の成果が記載されているので、目的の一項目にグローバル展開が明記されることにより、より大きな成果を期待できるようになる。

【基準２】組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、情報学部/研究科の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

評価欄　［　４　３　４　４　４　４　；　平均３．８　］

自由記述欄

〔A 委員〕

文工融合の組織目的を実現するため、３種類の教育プログラムなど情報科学と情報社会学の両分野の融合教育体制が整っている。また、教育活動の運営についても、教授会・教務委員会による検討の仕組みにより適切に実施されている。

〔B 委員〕

文工融合については、継続して広報に努める必要があると思います。

特に、静岡大学の浜松キャンパスにあるということで、情報科学技術が中心というイメージが強いので、情報社会学科についての外部への宣伝が大切だと思います。

〔C 委員〕

情報社会に視点を据えた情報社会学科を設置しているのが良い。これに合わせて教育プログラムを３つ用意し、それぞれが適切に特徴づけられている。

〔D 委員〕

教育研究にかかわる基本的な組織が､その目的に照らして適切に配置されている｡また、教育活動に必要な運営体制が適切に整備、機能している。

〔E 委員〕

理工系を基盤とする情報科学科と人文社会系を基盤とする情報社会学科の２学科体制は、教育目的を達成する上で、適切な組織構成であり優れている。

【基準３】教員及び支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

評価欄　［　４　３　３　４　４　３　；　平均３．５　］

自由記述欄

〔A 委員〕

教育や研究活動に関する評価システムが有効に機能されており、教員の資質の維持につながっている。ただし、社会・国際連携関係に若干課題があるように思う。

〔B 委員〕

教員の質や熱意、教育者としての度量、先見性など、優れた人材の確保は国立大学の生命線であると感じます。

全体の活性化のための、適度な変化を計画的に行っていくことも求められる点ですが、こうした人事上の運営は難しいことが多いのではないかと思います。

〔D 委員〕

情報学部採用基準ならびに昇格基準が規定され、適切に運用されている。また、「教員の個人評価に関する実施要項」において、教育分野、研究分野、社会・国際連携分野、管理運営分野において評価項目と表記基準が明記され、評価が継続的に行われ、適切に維持されている。

〔E 委員〕

教育活動をグローバルな視野で展開すべく、必要な教員が配置されている。とくに、ダイバーシティとしての女性教員の増加、グローバル化に向けての海外教員の増加は好ましい展開である。

〔F 委員〕

女性教員、外国人教員の比率が低いようにも思えますが、他学部、他大学と比較してどういうレベルでしょうか？

また、中長期的に目指す目標比率はあるのでしょうか？

【基準４】学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

評価欄　［　４　３　３　３　３　４　；　平均３．３　］

自由記述欄

〔B 委員〕

AO 入試は本当に効果があるのか、という疑問があります。入試業務の煩雑さを減らし、本来の研究や教育に専念する時間を増やしていくことも必要ではないかと感じています。

〔C 委員〕

アドミッション・ポリシーが明確である。

〔D 委員〕

アドミッション・ポリシーが明確に定められ、適切な学生の受け入れが行われている。また、実入学者数も入学定員に対して、適切である。

しかしながら、アドミッション・ポリシーが推薦入試、ＡＯ入試等にどのように反映されているか、明確ではない。また、近隣県からの入学者が多いにも関わらず、オープンキャンパスへの参加、進学相談会へ参加したものが少ない傾向にある。アドミッション・ポリシーを十分理解させるためには、参加者を増やし、学部の目的をより周知してもらうことが肝要と考える。

〔E 委員〕

AP は、情報学部、情報科学科、情報社会学科、情報研究科ともに適切に定められている。

ただし、情報学研究科の 2012 年 4 月の入学段階で、定員を下回る 49 名となっている点に着目した分析を行う必要がある。入学希望者の情報科学に対する魅力が低下しているのではないか。一因に就職難の問題があるのかもしれない。これは、静岡大学のみではないにしても、改善のための研究テーマの見直し、研究実績の向上策を検討しておくことが必要である。

【基準５】教育内容及び方法について

①（学士課程）

教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されているか。

学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

評価欄　［　４　４　４　４　３　４　；　平均３．８　］

自由記述欄

〔A 委員〕

講義と演習・実験を関連づけた教育プログラムの設定や産業現場の実態を理解させるための外部講師による授業の実施など､工夫を凝らした適切な学習指導を行っている｡また、学生の学力に合ったきめ細やかな学習指導が組織的に行われている。

〔B 委員〕

新しい学部である利点が、このような点で活きているように感じます。

〔C 委員〕

三つのプログラムがそれぞれ特色を持って運営されている。情報システムの基礎から社会応用までを視野に入れていて良い。

複数の GP を獲得するなど、良い教育をしているが、プロジェクト終了後の継続に難がある（大学院も同じ）。

〔D 委員〕

カリキュラム・ポリシーが明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されている。また、体系的な教育がなされている。

ディプロマ・ポリシーが明確に定められ、成績評価や単位認定など適切に実施されている。

しかし、学生生活実態調査によると「理解できない科目がかなりある」と回答した学生が 3 割近くおり、授業形態など改善が必要な部分があるものと思われる。またカリキュラムフローなど科目間の連関を学生に提示することも必要と考える。

〔E 委員〕

概ね適切に運営されている。インターンシップ、実践的なシステム演習は、産業界への貢献が期待できる教育カリキュラムとして評価する。留学制度も、学生に国際感覚とグローバルな教養を身に付けさせる上で重要である。

しかし、現状は学習交流協定大学に米国シリコンバレー地区にある大学が少ないのでこれを増加すべきである。これらの大学と交流することにより、最先端研究者、技術への直接接触が実現され、CS の学生たちに必要とされるグローバルな能力向上に大きく寄与すると期待される。

〔F 委員〕

１．「インターンシップ」「グループワーク」「フィールドワーク」「IT スペシャリストプログラム」などは社会人基礎力を育成する上で有用と思う。

２．社会人基礎力の観点から【教育内容及び方法】を点検してみることも有効かと思います。

②（大学院課程）

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等（研究・論文指導を含む。）が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

評価欄　［　４　４　４　４　３　４　；　平均３．８　］

自由記述欄

〔A 委員〕

文工融合を目的とする教育プログラムは、その特徴に応じた授業形態の組み合わせとなっており、バランスの取れた適切な学習指導がなされている。

〔C 委員〕

IS プログラムにおいて、両学科の学際的な分野が扱われているが、ID プログラムにおいて、今もう一段の情報技術の活用という視点があるともっと良くなると思う（情報社会学科の情報技術視点が若干弱いように感じました)。

〔D 委員〕

大学院課程においては、カリキュラムマップや履修モデルが明示され、教育課程が体系的に編成され学位名に相応しい教育内容、水準を有している。

学位授与の方針も明確に定められ、成績評価、単位認定等も適切に実施されている。また、組織的な大学院教育改革が進められている点など高く評価できる。

ただし、ディプロマポリシーやカリキュラムポリシーの今後の常なる再検討も必要であると思われる。

〔E 委員〕

概ね適切に運営されている。

修士論文に対して最低一回の学会発表を義務付けているが､論文作成中にも適切な学会、研究会等に参加して途中成果を発表すべきである。これは、他研究機関の研究者との議論から自身の研究の方向を確認する上で重要なステップとなる。

また、国内でも国際会議が多数開催されているので、費用の問題で海外に行くことができなくても、これらに参加して英語での発表が可能であるので、これを義務付け、グローバルな活動、発表能力の向上を図る等を検討すべき。

海外学会への発表は積極的に取り組んでいて、良好な指導がなされている。

【基準６】教育の成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

評価欄　［　４　３　３　４　３　３　；　平均３．３　］

自由記述欄

〔A 委員〕

就職実績から見れば、学習成果があがっているといえる。ただし、高度情報化社会を牽引していく人材育成が求められる観点からは、プレゼンテーション能力やリーダーシップなどの養成にさらなる工夫が必要では。

〔B 委員〕

このような点の情報を高校等にも、より発信してほしいと思います。

〔C 委員〕

一般論として、この項目は非常に自己評価が困難なものである。

卒業生の追跡調査が一つの鍵であろう。卒業生の補足率は同窓会を通じて行っているが，５割程度。研究室単位では８割以上把握している。

〔D 委員〕

卒業生、院修了生に対する調査ならびに就職先企業に対する調査を精緻に実施し、学生が身に着ける知識・技能・態度について、的確に検証し、教育の目的、人材像と照らして、身に着ける知識・技能・態度が習得され、学習成果が上がっている。

〔E 委員〕

卒業生の「業務を遂行する中で重要であると思う能力」の中で、英語の能力を「非常に重要である」と指摘した企業が 2.9%というのは信じ難い数字である。これが真実であるとすると、卒業生の就職先の国際性に疑問を抱かざるを得ない。このことが原因なのかは不明であるが、学生の TOEIC の点数が低いように感ずる。企業がグローバルに活躍できる社員に必要としているのは 800 点以上である。英語力向上の対策を検討すべき。

教育成果を発揮する上で、就職先はグローバルな人材を必要としている企業を優先すべき。但し、Data の取り方が不明なので適切なコメントになっているかよく分からない。

〔F 委員〕

１．「業務を遂行する中で重要であると思う能力」は、経済産業省の定義のように分類、階層化すると分かり易い。

２．その上で、社会人基礎力という概念を明確に意識させることが重要と思う。

３．静大生に限らず就職希望者において、概して、社会人基礎力における【前に踏み出す力】の不足、【チームで働く力】の物足りなさを感じる。

４．英語力は、入社時において Better ではあるが、Must ではない。業務上必要になる

が、入社後に修得して頂ければよい。

【基準７】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。

学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

評価欄　［　４　３　４　３　４　４　；　平均３．７　］

自由記述欄

〔A 委員〕

施設や設備など教育環境が整備されているとともに、学生への履修指導を始めとする諸々の支援体制も確保されている。

〔C 委員〕

就職率が良い。

オンライン学生ポートフォリオを導入している。

〔D 委員〕

教育課程に対応した施設・設備としては整備され、有効に活用されている。

しかしながら、学生アンケートから校内環境ならびに校内施設については過半数のものが満足と回答しているが、不満を持つものが一定数いる。

学生への履修指導等は、指導教員制度による日常的に相談できる体制と学生相談週間を設け、指導を行っているが学生アンケートからは悩みの相談相手として、教員は限られたものとなっている。日常的に相談できるために、オフィスアワーなどを設け、気楽に相談できる体制を作ることが望ましい。

〔E 委員〕

学生への履修指導は適切に行われている。

校内の様子から、学生達は明るく生活していることが見て取れる。

研究施設は整っており、有効に活用されている。

【基準８】内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

評価欄　［　４　４　３　４　４　４　；　平均３．８　］

自由記述欄

〔A 委員〕

FD 委員会を核とした取り組みにより、授業等の質的向上や改善が適切に図られている。

〔D 委員〕

授業報告書や授業アンケートなど積極的に行われ、授業改善のためのＦＤ活動が積極的に行われている。また、教育上についての点検・評価も適切に行われ教育の質の向上・改善のための体制も整備され、機能している。

ＦＤ委員会による授業参観が実施され、教育の質の改善・向上のための取り組も行われている。「情報学部を語る会」など教育の改善につながる行事も行われている。今後は、研修等で一層質改善・向上の取り組みが行われることを期待したい。

〔E 委員〕

良好に運営されている。

全学 FD 委員会が企画している授業のアンケートを前期、後期に実施し、自己点検を実行している。それによると、授業評価が高くなってきていて、教育の質の向上、授業改善に結びついていることが分る。

【基準９】管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。

評価欄　［　３　３　３　４　４　３　；　平均３．３　］

自由記述欄

〔A 委員〕

十分とはいえない事務組織の中で効率的に運営されているが、有事の際、危機管理マニュアルなど整備されているとはいえ、事務組織としての機能を十分発揮できるかが課題。

〔B 委員〕

教職員の年齢が高くなるにつれて、役職が重なり、多忙になっていくということを懸念します。

研究・教育に力を注ぐことができる環境が最も大事な点であると考えます。

〔D 委員〕

危機管理基本マニュアルならびに事象別危機管理マニュアルが整備されている。また事務組織を含めた連絡網も整備されている。日常的な管理運営体制については、総務委員会等を設け、適切に整備、機能している。

〔E 委員〕

総務係と学務係を一室にまとめた業務運営を実施し、無駄の少ない効率的な管理運営がなされている。

一つ気になるのは､不足の陣容をパート職員や派遣職員の採用で対応していることです。パートや派遣の方々の経験の少なさに起因する問題が起きないように教育をしっかり行う必要がある。特に危機管理への対応は慎重に行ってほしい。

〔F 委員〕

事務組織は｢無駄が無く非常に効率的｣とのことであるが、ギリギリのラインでコストセーブしながら運営している心証を受けた（勿論、実情はよく分からないが・・)。

危機管理については、マニュアルは整備されているものの、定期的な訓練により実効性を高めることが肝心であり、実態がよく分からない。

【基準１０】情報等の公表について

情報学部/研究科の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

評価欄　［　４　３　３　４　４　４　；　平均３．７　］

自由記述欄

〔B 委員〕

広報については、個々の教職員、また情報学部全体として今後も工夫を重ねていくことが求められると思います。

〔D 委員〕

学部･研究科のプログラムならびに教育目標がホームページ上で適切に公表されている。また、学部・研究科教務ガイダンスにおいて、教育目標の周知が適切にはかられている。

アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーについても、大学ホームページ等に明示され、適切に公表されている。

〔E 委員〕

大学内の関係者に対する周知は適切に実施されている。大学外の関係者には、web およ

び刊行物により適切に実施されている。

教育研究活動等の情報は、学会等を利用して随時行われている。また、外国語による教育研究活動等の情報発信も実施され、グローバルな活動となっていて好ましい。

【基準１１】研究活動の状況及び成果について

情報学部/研究科の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

情報学部/研究科の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

評価欄　［　４　４　３　４　３　４　；　平均３．７　］

自由記述欄

〔A 委員〕

情報学研究推進室を設置し、文工融合の研究を組織的に取組まれているとともに、点検評価委員会などの検証により、研究活動の質の向上等につなげる PDCA サイクルの仕組みが確立されている。

〔C 委員〕

X-プロジェクトを推進しているのは評価できる。

〔D 委員〕

Ｘプロジェクトと題した重点研究プロジェクトを実施し、情報学部教員によるチーム型の研究体制を奨励し、研究活動の積極的支援する体制が適切に整備されている。

また、情報学研究交流会などを行い、積極的な研究推進を進めている。

教員の個人評価結果を見ても、ほとんどの教員が積極的に研究活動を行っていることがわかる。

〔E 委員〕

概ね良好である。

自己評価報告書には、研究活動の目的、成果が網羅的に記述されている。

成果は定量的な記載も含まれているが、目標が定量的になっていないこともあり、活動が予定に対して十分に実施されたか判断しにくい。目標を期間や件数のように数値目標にすることも検討しないと正確な成果の判断は難しい。

【基準１２】地域貢献活動の状況について

本学及び情報学部/研究科の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

評価欄　［　４　４　４　４　４　４　；　平均４　］

自由記述欄

〔A 委員〕

地域連携推進室や情報学研究推進室の推進体制などにより、システムアーキテクト養成プログラムによる組み込みソフトの技術者育成を始め、浜松地域知的クラスター事業への支援など地域産業の育成に貢献しているほか、学生による IT 教育支援ボランティアや IT 講師補佐ボランティアなど多様な地域貢献活動が展開されている。

〔C 委員〕

浜松の地域産業の特性を考えた貢献をしており、「組み込みシステムアーキテクト」を育成しようとしている。

〔D 委員〕

ＩＴ教育支援ボランティア活動やＩＴ講師補佐ボランティア活動など、地域の委員会、小中学校と連携し、地域連携に積極的に取り組んでいる。

そのほか、個々の教員においては地域貢献につながる研究教育活動が行われていると推測できるが、今後はチームとして地域貢献につながる活動を期待したい。地域企業との連携も適切に行われている。

〔E 委員〕

地域連携推進室を設置し、IT 教育支援ボランティア活動、IT 講師補佐ボランティア活動、公開講座、浜松商工会議所ホームページ作成連携事業活動、等を通し計画に基づいた活動が適切に実施され、成果を上げている。

【基準１３】国際化の状況について

情報学部/研究科の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

評価欄　［　３　３　３　３　３　３　；　平均３　］

自由記述欄

〔A 委員〕

外国人学生の受け入れや学生の海外派遣について、さらなる積極的な展開を図る必要があるのではないか。

〔D 委員〕

研究科を中心に学術交流協定を提携するなど、教育の国際化に向けた活動を積極的に行っている。また、協定による交換留学や夏季短期留学制度、集中語学研修コースなどを設け、国際的人材育成に取り組んでいる。また、国内外のインターンシップ制度を設け、人材育成を図っている。

〔E 委員〕

英語語学教育に力を入れて運用しているようであるが、定量的評価がなされているTOEIC の点数から判断すると十分ではないように思える。たとえば、企業が必要とするグローバル人材には TOEIC800 点以上が期待されている。

海外教員の採用も進んでいるようであるが、英語による講座を増やす等、海外留学生を増やす施策も検討すべきである。

〔F 委員〕

海外派遣や海外インターンシップは、異文化に触れて興味を持つ契機としては有用でしょうが､少なくとも 1 年程度滞在しないと国際感覚･視野を養うことは難しいと思います。大学教育において目標とするレベルと施策の適合性がいまひとつはっきりしません。

総合評価（全体を通してのコメント）

〔A 委員〕

文工連携の教育目標の実現に向けて、教育・研究環境が十分整えられているとともに、教育・研究活動に係る PDCA システムが確立され、質の維持向上につながっている。

また、地域貢献については、学内の推進体制のもとで活動が活発に展開されており、地域のものづくりとの連携や地域の人材育成に大きく貢献している。

〔B 委員〕

今回、研究室を見せていただき、とても参考になりました。若い教員の方が、楽しそうに、また、てきぱきと説明する様子もたいへん好感を持ちました。

情報社会学科については、どのように社会に関わっていくのかという視点が重要になっているので、今後の可能性もいろいろと感じました。

〔D 委員〕

基準 13 項目のうち、十分に達成している項目 10 項目、おおむね達成している項目 3 項目（改善の必要、抜本的かつ全の必要な項目はなし）となる。

全体を通してみると、積極的に教育研究活動を行い、また改善のための取り組みを組織的に実施している点など、高く評価できる。

一部厳しいと思われる評価ならびにコメントを付けたが、今後積極的に改善のための取り組みが行われるものと期待している。

〔E 委員〕

組織の目的、組織の構成が適切に設定されていることから、教育活動を展開する上で必要な施策は良好に運営されている。また、グローバル化にも海外大学との連携等積極的に取り組んでおり良好である。ダイバーシティの向上として、女性教員、海外教員の積極採用も評価できる。

しかし、活動の目標値が期間、数量など定量的に示されていないため、成果の評価を難しくしている。定量的な目標値が設定されないと、前年比較のみが評価の目安になってしまう。これを続けると、組織活動がタコツボに入り込んでしまい、評価が組織の発展を阻害してしまう恐れもある。

また、他大学と比較して、静岡大学の全体成果がどのポジションにあるかを見えるようにすることも重要である。たとえば、一年間といった期間を決めて、論文数、特許出願件数、新聞発表件数、著書数、表彰件数、業績等、具体的に数値目標を決める。それらの達成度を知ることで、成果評価を容易にしかも客観的にできるようになる。また、他大学との比較も可能となる。

〔F 委員〕

全体を通して、自己評価報告書の内容は妥当と判断します。

大学教育や研究という職業領域において門外漢である小職がコメントするのは甚だ恐縮ですが、産業界の立場から少し感想を述べさせて頂きます。

１．文工融合の情報学創造という理念に大いに賛同します。是非、日本の大学、研究機関をリードして頂きたい。

２．基準６でもコメントしましたが、社会人基礎力の重要性を認識させ、社会に巣立つ前に少しでも身に付ける、或いは高める努力を促した方が宜しいかと思います。

おわりに

「はじめに」の研究科長の指摘にもあるように、情報学部の今回の外部評価は、平成 11 年度、20 年度についで 3 回目のものとなる。前回の実施時期からまだ間もなく、自己評価、外部評価ともあわただしい中で実施した感もあるのだが、この間情報学部・研究科ともさらに様々な改革を進めて来ており、この成果と問題点を振り返るには良い機会であったといえる。

外部評価委員会の実施については、昨年 7 月当初より既に議論を開始し、昨年中に外部評価委員候補の方への打診を進めてきた。平成 25 年 3 月に大部の『自己評価報告書』及び『資料集』が完成した後、早急に今回の日程を確定するとともに外部評価委員の方々にこの『自己評価報告書』・『資料集』を送付するとともに、事前説明をし、前回の『外部評価報告書』を参考のためにお渡しした。

外部評価委員会実施の平成 25 年 6 月 18 日には、寺田賢次氏、磯貝信二氏、中島秀之氏、淺川和雄氏、平岡法昭氏にお出でいただき、21 日には、米田公則氏にお出でいただいた。両日とも、漁田自己評価 WG 長による『自己評価報告書』についての補足説明の後、西原研究科長より、『自己評価報告書』を補足する形で情報学部・情報学研究科の内容等についての説明を行った。

質疑応答では、外部評価委員の方々からの率直な質問・意見が寄せられ、参加した情報学部側教員も細かく対応した。

その後の研究室・授業見学は、対応いただいた当該単位の関係者の準備もあって大変好印象を持っていただいたと考える。

最後の外部評価調査票への記載に基づく外部評価委員の方々からの講評では、的確なコメントをいただき、今後の国際社会環境変化の中での情報学部・情報学研究科の方向を考える上で、大変重要なものとなっている。この中で、文工融合を軸に様々に模索してきた静岡大学情報学部・情報学研究科の営み自体は高く評価されており、私たちは、これまでの歩みに自信を持ちつつ、今後の学部・研究科の将来計画にもこれらの指摘を活かしていきたいと強く念ずる次第である。

外部評価委員の皆様のこれらのご意見をもとに、今回の『外部評価報告書』をまとめたが、この様式には、前回の『外部評価報告書』(平成 21 年 1 月)を参考にさせていただいた。

最後に、大変に多忙な役職についておられる外部評価委員の皆様が、かなりの時間を割いて、静岡大学情報学部・情報学研究科の外部評価に尽力いただいたことに、学部関係者一同、心より感謝の意を表したい。

外部評価ワーキング長

藤井　史朗

外部評価委員会

平成25年度

静岡大学情報学部 概要説明

平成25年6月18日

[基準8]内部品質保証システム

評価の仕組み

毎年度の法人評価(実績報告書)→国立大学法人評価委員会

自己評価
外部評価
・大学の公式ホームページで公開
・各部局は，評価をもとに，改善を行う

↓ 静岡大学評価会議は，これにもとづき認証評価の資料を作成

機関別認証評価→ 大学評価・学位授与機構
中期目標・計画期間終了時
現況調査票→国立大学評価委員会

中期計画と業務の実施・評価の仕組み

第2期(H22～H27年度)

四半期ごと:
進捗管理

年度ごと:
業務の達成度を
法人評価
＝実績報告書として
国立大学法人評価委員会
に提出

[基準1～3]組織の目的、組織構成、教員及び支援者等

情報学部基本データ

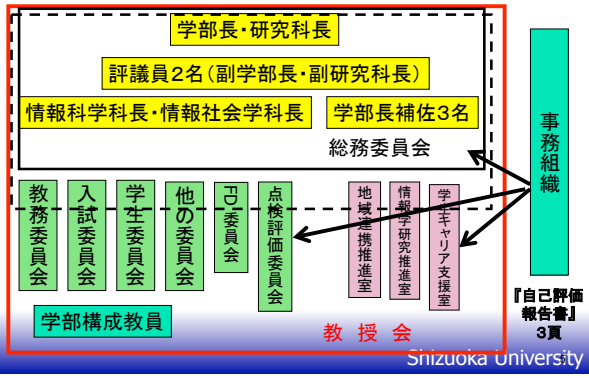
- 1995年(平成7年)
  情報学部が静岡大学(浜松)に設置される
  - 情報科学科(理工系情報領域)
  - 情報社会学科(社会文化系情報領域)
- 学生数 (2012年5月現在)
  - 1028名(情報科学科509名，情報社会学科519名)
  - 1学年200名強＋留学生・留年生など
- 教員数 (合計78名、2012年5月現在)
  - 情報科学科29名
    (教:13，准教:7，講:3，助教:5 助手:1)
  - 情報社会学科39名
    (教:24，准教:9，講:6)

→2013年度よりは情報学研究科所属

『自己評価報告書』4頁

[基準2]組織の構成[基準8]管理運営

情報学部・研究科の校務実施組織体制



『自己評価報告書』3頁

[基準4]学生の受入

情報学部の入試

情報学部・研究科とも アドミッションポリシー(『自己評価報告書』8＆14頁)にもとづいて入試を実施

ディプロマポシリー(『自己評価報告書』35頁)にもとづいて
カリキュラムポリシー(『自己評価報告書』18＆38頁)
を策定

カリキュラムポリシーにもとづいて
アドミッションポリシーを策定

前期日程入試・後期日程入試

	情報科学科（理系入試）	情報社会学科（文系入試）
前期個別試験	数学・英語	英語・小論文
後期個別試験	数学	英語

『自己評価報告書』8～13頁

情報科学科前期日程（2013年2月25日）

- 募集人員：60名
- センター試験：4教科5科目
  （国，理，数，外国語）
- 個別試験：数，英
- 特徴：数学の配分は500/1100

『自己評価報告書』8～13頁

情報科学科後期日程（2013年3月12日）

- 募集人員：20名
- センター試験：５または６教科７科目
  （国，地歴・公民・理から３，数，外国語）
- 個別試験：数
- 特徴：数学の配分は600/1250

『自己評価報告書』8～13頁

情報社会学科前期日程（2013年2月25日）

- 募集人員：55名
- センター試験：4教科5科目
  （国，地歴・公民から１，数，外国語）
- 個別試験：外国語，小論文
- 特徴：外国語の配分が450/1100
  外国語＋国語＋小論文の配分が800/1100

『自己評価報告書』8～13頁

情報社会学科後期日程（2013年3月12日）

- 募集人員： 30名

25名から30名に増加

- センター試験：5教科6科目
  （国，地歴・公民から１，理，数，外国語）
- 個別試験：外国語
- 特徴：外国語の配分が600/1200

『自己評価報告書』8～13頁

情報科学科AO入試

平成27年度入試から一般枠廃止

- 募集人員：13名（一般枠5名、専門高校枠8名）
- 第一次選抜（2012年9月22日（土））：
  基礎学力を問う試験（英語，数学もしくは数学・情報）及び書類審査
- 第二次選抜（2012年10月6日（土））：
  一般枠　個別面接＊及び集団面接＊
  専門枠　個別面接＊
  ＊いずれの面接も、口頭試問を行うことがあります
- 特徴：センター試験を課さない

『自己評価報告書』8～13頁

情報社会学科AO入試

一般枠廃止

- 募集人員： 5名（専門高校枠5名）
- 第一次選抜（2012年9月22日（土））：
  基礎学力を問う試験
  「英語」＋「課題図書に関する小論文」

  第二次選抜（2012年10月6日（土））：
  面接（口頭試問を含む）及び書類審査
- 特徴：センター試験を課さない
  面接の口頭試問は課題図書を中心に行う

『自己評価報告書』8～13頁

情報科学科推薦入試

- 募集人員：7名
- 選抜期日：2013年2月9日（土）
- 選抜方法：センター試験＋面接
- センター試験：５教科６科目又は４教科６科目
  （国，地歴・公民・理科から２，数，外国語）
- 推薦できる人員：高等学校１校につき２名以内
- 特徴：学力（センター試験、高等学校での学業成績）＋人物＋意欲＋適性

『自己評価報告書』8～13頁

情報社会学科推薦入試

- 募集人員：10名
- 選抜期日：2013年2月9日（土）
- 選抜方法：センター試験＋面接
- センター試験：４教科５科目
  （国，地歴・公民・理科から１，数，外国語）
- 面接：情報学に関わるミニ講義（15分）の後，面接
  過去のミニ講義のタイトルをHPで見ることができます
- 推薦できる人員：高等学校１校につき２名以内
- 特徴：学力（センター試験、高等学校での学業成績）＋人物＋意欲＋適性

『自己評価報告書』8～13頁

平成27年度入試での科目変更（前期・後期・推薦）

- 高校での新課程導入に伴ってセンター試験の教科・科目が変更されるためそれに対応
- 現在の高校2年生が対象
- 国大協の方針に従い、教科・科目を増やす方向で検討
  ◆情報科学科前期
  国，理，数2，外国語　→　国、社，理2，数2、外国語
  ◆情報社会学科前期
  国，社，数2，外国語　→　国、社・理 3，数2、外国語
- 本年末までに公表

『自己評価報告書』8～13頁

基準［５］教育内容及び方法

情報学部の教育

カリキュラムポリシー

情報学部は、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、下記の方針に従って教育課程を編成し実施する

1. 情報科学と情報社会学を包括する「情報学」を効果的に学ぶために、CS（計算機科学）、IS(情報システム）、ID(情報社会デザイン）の3分野の教育プログラムを展開する。

1学部2学科3プログラム

（平成16年度～）

『自己評価報告書』18頁

カリキュラムポリシー

2. 教育プログラムごとに、それぞれの専門分野における基本的知識・技術を身につけるための系統的な授業配置を行う

3つのプログラムの専門科目

3. 情報科学と情報社会学の複眼的な学びを促すために、3分野間の教育プログラムを跨ぐプログラム共通科目を配置する。

学部共通科目による総合的な学習

『自己評価報告書』18頁

2学科3プログラム制

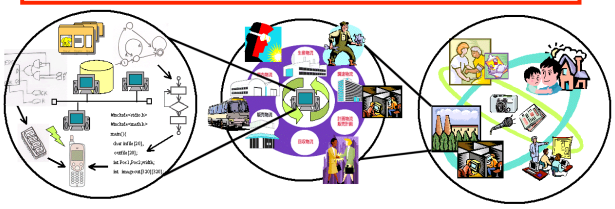
情報科学科	計算機科学（CS）プログラム CS=Computer Science
	情報システム（IS）プログラム IS=Information Systems
情報社会学科	情報社会デザイン（ID)プログラム ID=Information Society Design

プログラム登録は1年後期終了時

『自己評価報告書』18頁

3つのプログラムの領域

情報技術　情報システム　情報社会



CS　IS　ID

情報技術に軸足を据えた文工融合

情報システムに軸足を据えた文工融合

情報社会に軸足を据えた文工融合

『自己評価報告書』19頁

3つのプログラムのねらい

- **CSプログラム（計算機科学:Computer Science）**
  最先端の情報通信技術を身につけた国際水準の技術者を育てる。
- **ISプログラム（情報システム:Information Systems）**
  現実社会に役立つ情報システムの設計・開発・運用・評価・改善ができる人材を育てる。
- **IDプログラム**(情報社会デザイン: Information Society Design)
  情報社会のしくみと最新の諸問題を考察・分析し，これからの情報社会をデザインできる人材を育てる。

『自己評価報告書』19頁

カリキュラムの流れ

1年　2年　3年　4年

プログラム選択 将来の方向を選ぶ

研究室選択 研究分野・研究テーマを選ぶ

教養科目中心の学習 → 専門科目中心の学習 → 専門「演習」科目とゼミが中心 → 卒業研究

全学教育科目（外国語・教養科目）

専門科目
学部共通科目　→　（プログラム）専門科目

『自己評価報告書』26頁

情報学部共通科目の構成

『自己評価報告書』19～20頁 Shizuoka University 25

情報学方法論演習（学部共通、2年次後期）

キャンパス内の北食堂を観察する
2年次学生たち

2年次全員
CS,IS,IDの
4つの方法論を
実際に学ぶ
＜実験・観察＞

グループワーク

プレゼンテーション
（ポスター）作成

『自己評価報告書』19～20頁 Shizuoka University 26

専門科目（プログラム別）の構成

CS、IS、ID
の違いは
軸足の
違いです

『自己評価報告書』20～21頁 Shizuoka University 27

情報科学実験Ⅰ～Ⅲ
（CSプログラム3年）

- ハードウェア実験
  - 世界に一つしかない オリジナルなマイクロプロセッサをつくる
- ソフトウェア実験
  - 作成したマイクロプロセッサに搭載する ソフトウェアをつくる

『自己評価報告書』27～31頁 Shizuoka University 28

情報システム基礎演習－同開発演習
（ISプログラム　2－3年）

■身の回りにある　情報システムを分析改善する演習を通して、システムの設計原理を理解する

『自己評価報告書』27～31頁 Shizuoka University 29

コミュニティデザイン論及び演習
～都市・地域政策論及び演習
（IDプログラム2－3年）

・地域や現場（フィールド）に密着し、その姿をリアルに捉える技法を学んだり、具体的な都市・地域政策を学び、情報社会をデザインする基礎力を身につける

浜松市役所を見学し行政の仕組みを学ぶ
（浜松市市議会議事場）

『自己評価報告書』27～31頁 Shizuoka University 30

授業科目の構成と卒業所要単位 (2013年度1年生より)

教養科目	専門科目
必修科目	必修科目
選択必修科目	選択必修科目
選択科目	選択科目
32単位	92単位
卒業所要単位＝124単位	

キャップ制（履修登録上限制—2013年度1年生より）
一半期毎に登録できる総単位数が制限
情報学部　年間48単位一半期24単位(概ね12科目)

プログラム毎の卒業所要単位 (2013年度1年生より)

	CS	IS	ID
教養科目	32単位	32単位	32単位
学部共通科目（必修＋選択必修）	24＋1単位	24＋1単位	24+1単位
プログラム専門科目（必修／選択必修）	~~52単位~~	39単位	28単位
プログラム専門科目（選択）	9-15単位	22-28単位	~~33-39単位~~
合計	124単位	124単位	124単位

『自己評価報告書』22頁

学部教育における新しい試み（文科省Good Practiceの獲得）

情報学部：
特色GP『多角的評価で磨く文工融合型情報学教育（平成16～19年度）
大教センター・情報学部など：
現代GP『技術者の実践的対応力育成プログラム』（平成19～21年度）

情報学研究科の教育

情報学研究科のカリキュラム・ポリシー

- 1.　秒針分歩のスピードで革新を続ける情報技術と、それがもたらす社会の高度情報化の双方についての豊かな専門的知識を備えた、望ましい情報社会の構築に貢献しうる問題解決能力をもった高度専門職業人の育成を教育課程の基本的目標とする。
- 2.　情報科学と情報社会学とを連携・融合させた複眼的アプローチによって、解決する能力を獲得できる教育を行うため、文工融合を教育の基礎にしたカリキュラムを設置する。
- 3.　さらに、系統的な専門教育も実現するため、3分野からなる教育プログラムをおき、授業と研究指導を行う。

『自己評価報告書』38頁

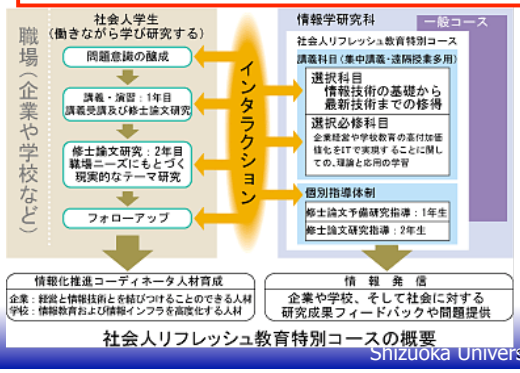
情報学研究科の3つのプログラム

- 計算機科学プログラム、情報システムプログラム、情報社会デザインプログラム
- これら3つのプログラムは、学部の3つのプログラムに対してそれぞれ積み上げられたプログラムである。それぞれのカリキュラムは、学部4年間と合わせた6年間を一体的に考えた上で構成されています。

『自己評価報告書』39頁

社会人再教育のための特別プログラム

『自己評価報告書』49頁



社会人リフレッシュ教育特別コースの概要

大学院教育における新しい試み

（文科省Good Practiceの獲得）

情報学研究科：

マニフェストに基づく実践的ＩＴ人材の育成

（平成20～22年度）

『自己評価報告書』41頁

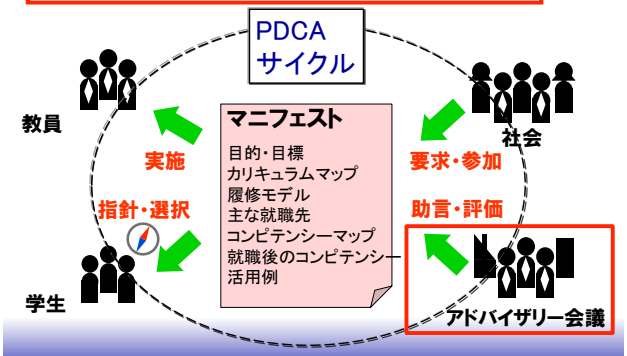
（先導的ITスペシャリスト育成プログラムの獲得）

名古屋大学、静岡大学情報学研究科：

OJLによる最先端技術適応力を持つIT人材の育成拠点の形成（平成18～21年度）

『自己評価報告書』45頁

大学院GP：マニフェストに基づく教育



[基準6]教育の成果

情報学部の就職状況

平成24年度の進路

平成24年度進路状況（平成25年4月1日現在）

進路状況	情報学部			大学院情報学研究科			学部＋大学院
	情報科学科	情報社会学科		情報科学系	情報社会系		
	92名	106名	198名	42名	12名	54名	252名
進学希望	41	5	46	1	0	1	47
進学決定	41	5	46	1	0	1	47
	100%	100%	100%	100%		100%	100%
就職希望	46	98	144	41	11	52	196
就職内定	44	90	134	40	11	51	185
	96%	92%	93%	98%	100%	98%	94%
その他	5	3	8	0	1	1	9

「その他」：留学、研究生、就職せずなど

『自己評価報告書』70～73頁

情報学部就職支援

- 就活支援セミナー
- 学部独自の合同企業説明会
- 就職座談会
- 推薦応募学生指導
- 就職未定学生個別指導
- インターンシップ

『自己評価報告書』70～73頁

[基準7]施設・設備及び学生支援

学　生　生　活

静岡大学情報学部における学生指導体制

4年間指導教員制による学生生活指導

- 自己責任を持つ学生の自立を前提に、高校のクラス担任とは違う存在.
- 一番身近な大人として.
  - 勉学や進路の相談
  - 学生生活一般に対する問題
  - 人生相談など

に対応し、支援するのが**指導教員**。

『自己評価報告書』70～73頁

年2回の学生指導週間

- 指導教員が直接、学生と面談し
  最近の生活の様子や学習状況を尋ねる

- 状況によっては保護者に連絡をとる
- 学生委員会で結果とりまとめ
  個別に教員を支援

『自己評価報告書』70～73頁

情報学部保護者懇談会

- 学部の活動に対して理解をしていただく場を持つため、保護者懇談会を年2回開催
- 1つ目は新入生の保護者の皆様を対象とした保護者懇談会を開催
- 2つ目は全学年の保護者の皆様を対象とした保護者懇談会で、テクノフェスタ・静大祭 in 浜松と同日に開催
- 全体会と指導教員による個別相談会

『自己評価報告書』70～73頁

2013年4月保護者懇談会の模様

『自己評価報告書』70～73頁

休退学の実態

- 休学者：30名
- 復学者：32名
- 退学者：18名

- 経済的理由による休学者が増加
- 情報科学科に退学者が多

平成24年度　学生異動集計

異動種別	科学科	社会学科	計
復学	**19**	**13**	**32**
休学(病気)	3	1	4
休学(経済的理由)	2	4	6
休学(進路の迷い)	12	3	15
休学(留学)	0	0	0
休学(一身上の都合)	3	2	5
休学(家庭の事情)	0	0	0
休学(その他)	0	0	0
休学の合計	**20**	**10**	**30**
退学(一身上の都合)	0	0	0
退学(学業不振)	4	0	4
退学(進路変更)	6	1	7
退学(就　職)	3	1	4
退学(他大学入学)	2	1	3
退学の合計	**15**	**3**	**18**

『自己評価報告書』70～73頁

[基準11]研究の活動及び成果

研究・プロジェクト

情報学部・情報学研究科における「文工融合」研究

- 情報学部・研究科は、コンピュータネットワークを中核とする急速な情報化の進展の中で、人間と情報技術が共生する豊かな情報社会の実現が、21世紀の課題
- 理工系の情報科学・情報工学とさまざまな文系の学問を融合をさせることで、「情報学」という新しい学問体系を創造する

『自己評価報告書』85頁

情報学部・情報学研究科の文工融合のグラデーション

理工系と文系の融合比は違っていても、すべて文工融合

図 11-1-1. 情報学部・情報学研究科の文工融合のグラデーション.
図中の番号は、「1. 研究目的」で記載した5つの研究成果を指している。

→図中(1)～(5)は、次頁

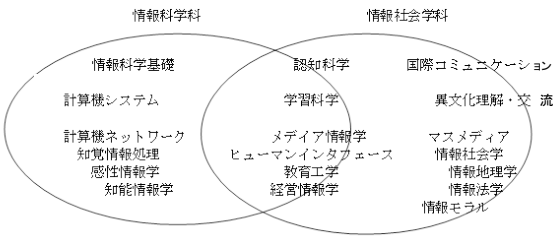
『自己評価報告書』85頁

前図の(1)～(5)―情報学研究の広がり

- (1)情報を切り口とした人間や社会のあり方の解明
- (2)情報と人間・社会のインタラクションの解明
- (3)情報を活用する技術・方法の基礎的過程の解明
- (4)情報活用技術・方法の開発
- (5)情報活用技術・方法を基にした人間社会システムのあり方の提案

『自己評価報告書』84頁

両学科所属教員の研究領域



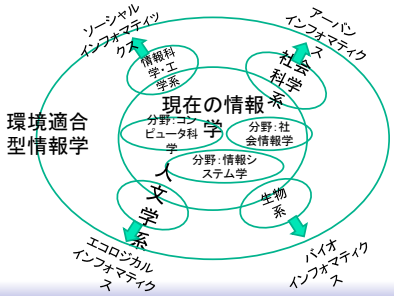
『自己評価報告書』87頁

情報学部における研究支援戦略

- 情報学研究推進室の設置
  - ・学部・研究科の研究推進の支援
    - 学内集団研究の支援(X-プロジェクト)
    - 教員の外部資金獲得を援助((S-プロジェクト)
  - ・客員教授制度　17名
  - ・産学官連携の推進(企業との共同研究など)

『自己評価報告書』87頁

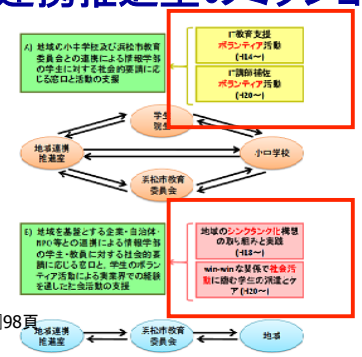
越境する情報学



『自己評価報告書』89～97頁

[基準12]地域貢献活動の状況
地域連携の取組み

地域連携推進室のミッション



『自己評価報告書』98頁

地域連携推進室主導による主な取り組み

理念：情報学部ならではの特性を生かした主な活動展開

（1） 近隣小中学校へのIT教育支援
　　各種コーディネイトおよび学生ボランティアの派遣

（2） 浜松市教育委員会主催教職員IT教育研修の支援
　　講師補佐の派遣および室内事前研修

（3） 公開講座の開講
　　『情報学アラカルト講座』の実施

（4） 浜松市商工会議所との連携事業
　　ホームページの一部を作成

（5） その他　・静岡大学付属島田中学校との学内連携
　　・学部内公募プロジェクト

『自己評価報告書』98頁

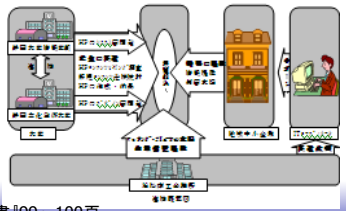
（1）学生ボランティア活動

『自己評価報告書』99頁

（4）浜松市商工会議所との連携事業
―中小企業のHP作成支援活動―

2010　事業従事

（経済産業省関東経済産業局の委託事業として実施する「関東経済産業局広域関東地域イノベーションパートナーシップ推進事業」の一環として実施）[2011年度に終了]



『自己評価報告書』99～100頁

事業所（ファッション着物いしばし）との打ち合わせ風景

浜松市土産品協会との打ち合わせ風景

『自己評価報告書』99～100頁

制御系組込みシステムアーキテクト養成プログラムと「組込みソフトウェア技術コンソーシアム」

『自己評価報告書』100～101頁

制御系組込みシステムアーキテクト養成プログラム（科学技術振興調整費）

- 静岡大学と浜松市の共同提案
- 地域再生人材創出拠点の形成プログラム
  - 対象期間： H20年度から5年間（３月で終了）
  - 育成する人材：システムアーキテクトの養成
    - システムの利用・開発等の要件を満たすシステム構造ならびに開発プロセスを設計する技術者（ＥＴＳＳ定義）
    - 技術者間の交流の場
    - 情報交換，マッチングの場
  - 補助金終了後も人材養成を継続し、知の拠点の形成を目指す

『自己評価報告書』100頁

アーキテクト養成プログラムの成果

- 平成24年度末まで135名の受講生を輩出
  - 目標：110名
  - 実績：135名
    - 目標を20%以上上回る人材養成の成果
- 派遣元企業に戻り業務を継続
  - 習得したソフトウェア開発技術，マネジメントスキル等を企業に持ち帰り展開
  - 企業の技術力の底上げにも貢献

『自己評価報告書』100頁

組込みソフトウェア技術コンソーシアム（H25年度から）

1. 名称
   - 組込みソフトウェア技術コンソーシアム（HEPT: Hamamatsu Embedded Programming Technology Consortium）
2. 活動項目
   - 組込みシステムアーキテクト養成プログラム
   - C-プログラミングコース
   - 組込みソフトウェア開発技術研究会

コンソーシアムの活動

- 組込みシステムアーキテクト養成プログラムを継続
  - 10年の技術トレンドに対応できるソフトウェアのコア技術を反映する
    - モデルベース開発の普及
    - レガシー手法とモダン手法のブリッジング
- C-プログラミングコースを開設
  - 体系的なプログラミングスキル、開発スキルの習得
  - システムアーキテクトへの予備軍として、プログラミング腕力の養成
- 組込みソフトウェア開発技術研究会を主催
  - アーキテクト受講生の企業復帰後のフォローアップ
  - 企業ニーズに応じたモデルベース指向の開発方法の研究会

[基準13]国際化の状況

静岡大学および
情報学部からの留学

静岡大学からの留学

全学的取り組み（国際交流センター提供）

- 大学間交流協定に基づく短期留学
  韓国・中国・アメリカ・カナダ・フランス・ドイツ・・・
- 夏季短期留学　韓国・アメリカ・カナダほか

『自己評価報告書』23～24頁

シドニー大学短期集中コース

情報学部が主導する留学制度

- 平成25年度 は12月19日～1月5日（予定）

『自己評価報告書』23～24頁

概要

- 授業科目名　Australia: Land and Nation
- 担当教員　ソニア・ミチャック（Sonia Mycak）先生
- 授業内容
  - ☆午前　９：００－１２：００
    オーストラリアの歴史、多民族・多文化社会、文化についての講義（途中、モーニングティーの休憩が３０分ほど）
  - ☆午後　１：００－４：００ごろまで
    講義内容に関連した史跡、コミュニティ、寺院などの実地見学
  - ☆夕食後　ワインテースティング、ビデオ鑑賞、パーティーなど

- 休日には種々のレクリエーションが用意されている(次頁)。
- 静岡大学他学部、岐阜大学教育学部の学生も参加する。
- 情報学部、岐阜大学教育学部から各1名の引率教員が参加。

『自己評価報告書』23～24頁

海外インターンシップ
（情報学研究科）

- 大学院GPの「国内外インターンシップ」がスタート
- 平成20年度～24年度
- 38名が派遣（3ヶ月～2週間）
- 派遣先
  ロンドン富士通研究所
  Hitachi Data Systems（アメリカ合衆国）など

『自己評価報告書』105・106頁

ご静聴ありがとうございました。

2013/06/18　外部評価委員会資料　漁田

自己評価報告書について

１．自己評価の対象となる期間は，第 2 期中期計画期間です。

⑴ 第 1 期中期計画期間では，2008 年度に自己評価報告書を作成し，外部評価を受けた。

⑵ 第 2 期中期計画期間の今回は，全学一斉に，2013 年度末までに自己評価報告書を出すことが求められた。

⑶ 2012 年度に作業を行った。多くは 2010-2011 年度の成果を反映している。

・特に，収集した研究業績は，2 年間（2010-2011 年度）のもの。

・2012 年度に大きな改革等を行った場合，それをできる限り組み込んだ。

⑷ 第 2 期中期計画期間の成果というよりは，現況についての自己評価となっている。

・それでも，情報学部・研究科は，継続的に改革を行っているので，
ある程度評価可能な内容を取りそろえることができたのではないか。

⑸ なお，昨年度まで情報学部本務でしたが，本年度から情報学研究科本務に変わった。
残念ながら，自己評価書の組織等は，現況をも反映していない。

２．自己評価は，13 の基準に対して行った。

これは，機関別認証評価の基準であり，部局単位の自己評価にふさわしくないものも含まれている。

基準８内部品質保証システムの［８－１］

８－１－①　自己評価をしているか

８－１－②　外部評価を受けているか

基準１３　国際交流　１部局の手に余ることが多い。

＊機関別認証評価は，7 年に１回，すべての大学・短大（公国立と私立）が受ける。

静岡大学は，第１期計画の最終年に，最初の認証評価を受けた。

第２期計画では，H27 に受ける予定（昨日の評価会議で報告）。これでは，６年に１回になる。

＊＊国立大学はそれに加えて，国立大学法人評価委員会による現況分析を，毎回の中期計画期間に（6 年に 1 回）受けることになっている。

受ける項目は，第１期では，⑴ 学部と大学院の教育，⑵ 学部・大学院の研究

第２期の現況分析については，今年９月に説明会があり，明らかになる。

３．自己評価報告書は，極力，本文を読めば理解できることを念頭においた。

⑴ 必要な場合，資料を参照できる。

・必要な情報（たとえばディプロマポリシー）は，本文に掲載した。

・url は，ここに公開しているというエビデンスとして記載した。

・その場合も，url を参照しなくても，内容が分かるように書いた。

⑵ 資料も，資料集を見なくても良いように書いた。

・たとえば READ ME も，必要な箇所は，本文または資料集に掲載した。

・掲載ページは，そこにあるということを示している。
そのページを見なければ分からないのではないようにした。

４．いずれにせよ，忌憚のないご意見をいただきたい。

⑴ 問題点等を，今年度中に改善し，これからの現況分析に活かしたい。

⑵ なにより，情報学部・研究科の改善に活かしたいという思い。